

辞的成分と共起する副詞の計量的研究

小 池 康

1. はじめに

いわゆる陳述副詞をはじめとして、共起[*1]を起こす語がある。しかし、近年、この共起の制約が崩れてきた語が見受けられる。このような共起の制約の崩れを、一般の日本語使用者はどのように認識しているのだろうか。本稿で対象とするのは、副詞と共起成分との結び付きに対する日本語使用者の意識を、アンケート調査を通して明らかにすることにある。特に本稿では、時代的世代的な側面からみた共起意識の違いを考察する。

2. 調 査

2.1. 調査概要

調査は、共起成分の違いにより、表現の自然さ[*2]がどのように変わってくるかを聞いた。しかし、共起成分の違いといっても、ヴォイス、アスペクト、モダリティなどのさまざまな文法的カテゴリーの違いや、「もし」や「たとえ」のような従属節内で共起を起こすような語もあり、それらを一度にすべて調査するのは質的量的に膨大となり、被験者の負担等を考えても難しくなる。それゆえ、本研究における調査は共起成分が肯定／否定の対立をなすものを中心に行なうことにした[*3]。本稿では、そのうち共起成分に肯定辞（非否定辞と同義）／否定辞の対立をなすものを取り上げる。

これは、たとえば、

1-1. 「私は細川さんをあまり知っている。」

1-2. 「私は細川さんをあまり知ら ない。」

のように、共起成分に「ない」などの否定辞をとったほうが自然か、とらないほうが自然かを調べることにより、共起成分に対する意識の違いを見ようとするものである。

2.2. 本 調 査

2.2.1. 本調査語の選定と形式

予備調査[*4]の結果、自然さの分布が明確に分かれる語（項目）、および副詞の形式が「名詞＋助詞」の語を調査の対象から外すこととした。後者は、この形式の語まで含めると、調査項目が多くなり被験者の負担となるため、またこの形式は助詞の影響を多分に受けるため、副詞自体の問題とはやや性格を異にすると考えられたためである。

以上を経て、調査語は19語、調査項目は49項目を作成した。以下にそれを示す。

あまり 私は細川さんをあまり知っている／私は細川さんをあまり知らない
 あんまり 私は細川さんをあんまり知っている／私は細川さんをあんまり知らない
 いっさい この仕事はいっさいあなたに任せます／この仕事はいっさいあなたに
 任せません
 おそらく 今日はおそらく雨が降る／今日はおそらく雨が降らない
 かならず 来週は、かならず来て下さい／来週は、かならず来ないで下さい
 きっと きっと彼は来ますよ／きっと彼は来ませんよ
 決して 私は彼を決して許す／私は彼を決して許さない
 さして さして難しいことです／さして難しいことはありません
 さほど さほど食べたので太った／さほど食べないのに太った
 ぜったい 今度はぜったい来て下さい／今度はぜったい来ないで下さい
 ぜんぜん (大丈夫) ぜんぜん大丈夫だよ／ぜんぜん大丈夫じゃないよ
 ぜんぜん (問題) ぜんぜん問題あるよ／ぜんぜん問題ないよ／ぜんぜん問題だ
 よ
 大変 (良い) この絵は大変良い／この絵は大変良くない
 大変 (悪い) この絵は大変悪い／この絵は大変悪くない
 どうか どうか召し上がって下さい／どうか召し上がらないで下さい
 どうぞ どうぞ召し上がって下さい／どうぞ召し上がらないで下さい
 とても (おいしい) これはとてもおいしい食べ物です／これはとてもおいしくな
 い食べ物です
 とても (まずい) これはとてもまずい食べ物です／これはとてもまずくない食
 べ物です
 なかなか (おいしい) この料理はなかなかおいしいよ／この料理はなかなかおいし
 くないよ
 なかなか (まずい) この料理はなかなかまずいよ／この料理はなかなかまずくな
 いよ
 はっきり おっしゃることがはっきりわかります／おっしゃることがはっきりわ
 かりません
 まだ (降) 雨はまだ降っている／雨はまだ降っていない
 まだ (残) 食べ物はまだ残っている／食べ物はまだ残っていない
 まったく この町はまったく静かですね／この町はまったく静かではありません
 ね

上記調査項目は、「ぜんぜん問題だよ」を除き、スラッシュ (/) の左側は肯定辞を、
 右側は否定辞を示す。以下、文中では各調査項目を「あまり (肯定)」「ぜんぜん (大丈
 夫) (否定)」などと記述する。

以上の各項目について、それぞれ「1. 自然」「2. やや自然」「3. やや不自然」「4.

不自然」および「?. わからない」の5カテゴリーより、該当するものに丸を付けてもらった。

調査用紙の最終的な形式は図1の通りである。

図1 調査形式

| | 自然 | やや自然 | やや不自然 | 不自然 | わからない |
|-----------------|----|------|-------|-----|-------|
| 「ぜんぜん問題ないよ。」 | 1 | 2 | 3 | 4 | ? |
| 「きっと彼は来ますよ。」 | 1 | 2 | 3 | 4 | ? |
| 「どうぞ召し上がって下さい。」 | 1 | 2 | 3 | 4 | ? |

2.2.2. 調査対象

調査対象地域は、茨城県つくば市の公共住宅地域（吾妻、春日、竹園、並木、松代）および千現地区のマンションである。そして、この対象地域に居住する16歳（高校生以上）から80代までを母集団と設定した。

被験者は、つくば市役所において、各年齢層100名ずつ層別にサンプリングし（ただし、70、80代は合わせて100名）、総数723名に留置調査法によりアンケート調査を行なった。

その結果、調査用紙回収総数は455部（62.93%）、うち有効回答用紙数は418部（57.81%）であった。

3. 分 析

3.1. 概 要

調査用紙の最初には、フェイスシートを付けた。そこでは、「性別」「年齢」「10代の時に過ごした場所」「学歴」「職業」の五つの変数を聞いた。

本稿では、時代別世代別の視点から共起の認識の違いについて考察したいので、「年齢」と「職業」に焦点を絞り分析する。

以下の各分析では、有意差（ $p < 5\%$ 、以下同）の認められた調査項目を中心に見ていく。なお、本調査分析にあたり、東京都立大学の荻野綱男助教授作成のアンケート調査分析用ソフトウェア「GLAPS」を使用した。

3.2. 年齢による分析

変数「年齢」は、年齢別で副詞の共起の認識の違いが表われるかどうか焦点を当てるために設定した[*5]。

分析は、年齢を大きく三層に分けて行なった。10、20代を「若年層」、30～50代を「中年層」、60代以上を「老年層」とした。各層の人数と比率は、表1に示す通りである。

年齢別において、有意差の出た調査語を図2に掲げる。

図2を見る限り、年齢別によって自然さの判定が正反対になるような、極端に異なる項目は見当たらない。しかし、年齢別により、自然さの判定の度合い（平均値）に傾向

表1 年齢別の構成

| 若年層 | 中年層 | 高年層 | 無記入 | 計 |
|-------|-------|-------|------|--------|
| 80 | 228 | 105 | 5 | 418 |
| 19.14 | 54.54 | 25.12 | 1.20 | 100.00 |

図2 年齢別の平均値分布 [*6] [*7]



が認められる。

有意差の認められた調査項目は全部で20項目あるが、そのうちの11項目については「若年層」とその他二つの年齢層との間に差が認められた（「全」も含む）。そして、この11の項目のうち9項目において、「若年層」は他の年齢層よりも許容度が高い。特に、「ぜったい」や「ぜんぜん（大丈夫）」では、肯定辞／否定辞にかかわらず、許容する傾向があることがうかがえる。以上のことから、「若年層」は共起成分に辞的成分があってもなくても、許容する傾向にあると言える。

また、「高年層」とその他二つの年齢層に有意差の見られたものが6項目あった（「全」も含む）。特に、「いっさい」では、二つの項目ともに有意差が認められ、「高年層」において明確な共起成分の使い分け意識がはたらいていると言える。その意味で、この「いっさい」には、「高年層」から他の年齢層への共起制限意識の緩和といった変化の様相が見て取れる[*8]。しかし、調査語全体からでは、「高年層」は共起成分の使い分け意識がはっきりなされていると言えるほどの結果は見られなかった。

3.3. 職業別による分析

変数「職業」[*9]は、「学生」「会社員」「主婦」「退職者」「無職」の5カテゴリーで分析する。

「学生」50名はすべて10代（全体のほぼ7割）と20代で、年齢の若い世代で占められている。「会社員」は20代から80代までいたが、全体の8割弱を占めるのは30代から50代である。「主婦」も、20代から80代までいるが、30代から50代が全体の7割程度を占める。「退職者」「無職」は年配者層である（「退職者」はすべて60代以上、「無職」は20代で3名、30代で1名のみで、他の33名はすべて60代以上）。また、「退職者」14名中、男性は12名、女性は2名と男性が多く、逆に「無職」では37名中、男性は7名、女性は29名、無記入1名で、女性が多かった。

「職業」において、有意差の認められた調査語の平均値分布（図3）は、カテゴリー数が五つあるため、有意差の現れ方は多岐に渡っている。それゆえ、カテゴリー間でどのような違いが出たかが一目ではわかりにくい。そこで、各カテゴリー間において有意差の出た項目がいくつあったかを一覧にまとめた（表3）。

まず、「学生」と「会社員」「主婦」を比較してみる。これは代代的に「学生」が「会社員」「主婦」の子女の世代に相当すると想定でき、この比較より親の世代と子の世代で、副詞の共起にどのような認識の違いがあるのかをうかがい知ることができると考えられ

表2 職業別の構成

| 学 生 | 会社員 | 主 婦 | 退職者 | 無 職 | その他[*10] | 無記入 | 計 |
|-------|-------|-------|------|------|----------|------|--------|
| 50 | 158 | 131 | 14 | 37 | 19 | 9 | 418 |
| 11.96 | 37.80 | 31.34 | 3.35 | 8.85 | 4.55 | 2.15 | 100.00 |

図3 「職業」別の平均値分布 [*11]

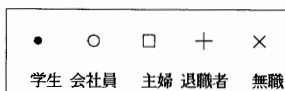
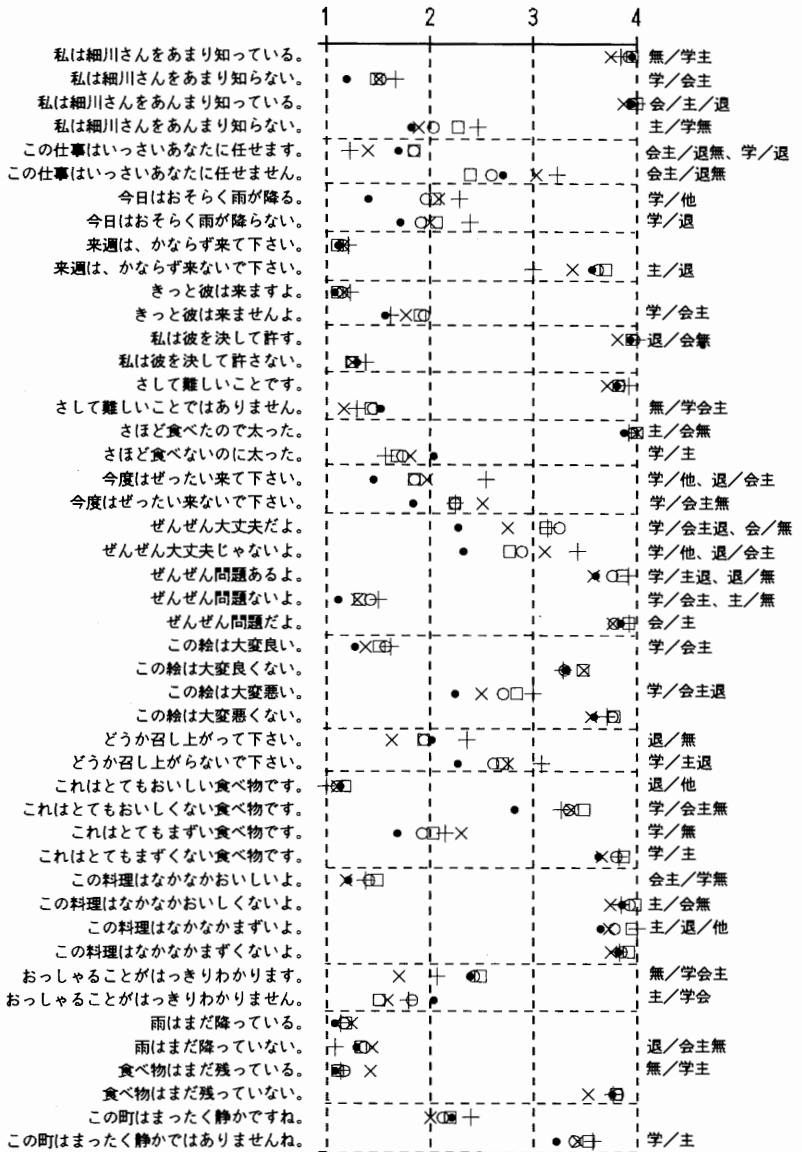


表3 「職業」におけるカテゴリー間の有意項目数

| | 学 生 | 会 社 員 | 主 婦 | 退職者 | 無 職 | 計 |
|-------|-----|-------|-----|-----|-----|----|
| 学 生 | | 12 | 20 | 11 | 10 | 53 |
| 会 社 員 | 12 | | 6 | 9 | 6 | 33 |
| 主 婦 | 20 | 6 | | 9 | 11 | 46 |
| 退職者 | 11 | 9 | 9 | | 6 | 35 |
| 無 職 | 10 | 6 | 11 | 6 | | 33 |

るからである。

図3および表3を見ると、「学生」は特に「主婦」との間に有意差が見られた項目が多かった。そして、「学生」の平均値は相対的に小さい値であり、共起辞の有無にかかわらず自然と意識する傾向にあることを示している。特に、「おそらく」や「ぜんぜん（大丈夫）」といった調査語では、平均値の差が大きくなっている。近年、若い世代で「ぜんぜん」を否定辞を伴わないで表現する例をよく耳にし、言葉の乱れなどとも言われているが、子の世代と親の世代の言語感性の相違が本調査によっても明らかになったと言える。[*12]

なお、表3より、「会社員」と「主婦」の間で有意差の出た項目は6項目あった。しかし、極端に数値に開きがあるというわけではなく、その差は少ない。「会社員」と「主婦」は、夫婦関係にあるという想定が成り立ち、その点で言語感性に大きな違いが出なかったのではないかと考えられる。

次に「会社員」「主婦」と「退職者」「無職」との間について考察する。この前二者と後二者は、先の「学生」／「会社員」「主婦」同様、世代的な開きが想定できる。つまり、「退職者」「無職」の子の世代が「会社員」「主婦」であり、その意味で世代的な言語感性の違いについて考察することができるものと考えられる。

分析の結果、数的には「学生」／「会社員」「主婦」ほどではないが、有意差の認められた項目があり、「退職者」もしくは「無職」と「会社員」との間に有意差の見られた項目では、「主婦」との間にも有意差が見られた項目が多かった。このうち、「いっさい」の両項目や「ぜったい」「ぜんぜん」では、数値に若干の開きが見られる。特に「いっさい」では、「退職者」「無職」とも、肯定辞付随の場合と否定辞付随の場合で許容度が反対になるが、「会社員」「主婦」はそれほどではない。これは、「退職者」や「無職」には「いっさい」という副詞の共起辞の使い分け意識が明確にあるが、次世代とも言うべき「会社員」や「主婦」ではその使い分け意識はそれほどはっきりと存在しているわけではないと言え、世代間の言語感性の違いが表われている例と言えよう。

表3より、「退職者」と「無職」の間で有意差が認められたものは6項目あった。「退職者」と「無職」を比較してみると、「会社員」と「主婦」の場合と異なり、平均値に関

きが見られる項目がいくつかある。特に「どうか召し上がって下さい」では、「退職者」の平均値は2.36で全カテゴリー中一番自然さの低い表現であるという判定なのに対し、「無職」の平均値は1.63と全カテゴリー中一番自然さの高い表現であるという判定となっている。また、これほどではないにせよ、「ぜんぜん問題あるよ」や「雨はまだ降っていない」においても、相対的に対極的な平均値の出現のしかたである。

「会社員」と「主婦」では、互いが夫婦関係にあるという想定で、それが言語感性を同じくしている理由であるという解釈をした。しかし、同じく「退職者」と「無職」にも、互いが夫婦関係にあるという想定をすると、夫婦関係にありながら言語感性がわずかながらでも異なっていることは矛盾することになる。

そこで考えられるのは、「退職者」および「無職」の年齢的および教育的な背景である。両者は、60代以上を中心に構成されており、そのことは現在よりは性差による教育が厳格であったと思われる第二次大戦終戦前に言語形成期を迎えていることになる。性別の違いにより、まったく異なる言語教育がなされていたとは考えられないが、少なくとも言葉遣いなどで、男性は男性らしく、女性は女性らしくといったことが比較的厳しく教育されていたのではないかと。そして、それは結果的に、性別の違いによる言語感性の違いとなって、現在まで影響しているのではないかと考えられる。

しかし、変数の「性別」と「学歴」を合わせたデータ結果と比較した場合、必ずしもその考えを積極的に支持しうるに足る結果は得られなかった[*13]。だが、第二次大戦を境に教育システムは変わり、それまでの男女それぞれの価値観や意識に変革をきたしたと措定できるから、上記仮説が完全に否定されるものでもないと思う。本調査では設定しなかった、より細かな変数の影響があるのかもしれない。

「学生」を「退職者」「無職」と比較すると、「学生」の平均値はここでも比較的小さい値をとる傾向にある。項目では、「ぜったい」や「ぜんぜん(大丈夫)」「とても」などで数値の開きが大きいことがわかる。「学生」は、特に「退職者」と比べた場合、平均値の差が大きく開いている項目が多く見られる(「おそらく」「ぜったい」など)ことから、「学生」の言語感性と「退職者」の言語感性は対極をなしていると言えよう。

4. おわりに

副詞の共起に関し、「年齢」および「職業」という変数を中心に、時代的世代的な側面から考察した。「年齢」による分析では、「若年層」が共起辞の有無にかかわらず各項目を許容する傾向が見られた。また、「学歴」における「学生」についても、「若年層」と通ずる傾向がうかがえ、両カテゴリーとも若い世代という共通性がある。

「職業」における「退職者」と「無職」は、「年齢」における「高年層」と世代的に同じで、これらのカテゴリーでは、各項目の許容度は相対的に低く、「若年層」「学生」とは対極的な様相を呈した。

「年齢」の「中年層」のみ「中/他」という項目がなく、それより共起成分に対する意識の境界は「若/中・高」か「若・中/高」になると考えられるが、「職業」では、「学

生／会社員・主婦／退職者・無職」のように、相互間で言語意識の差異が見られた。また、「会社員」と「主婦」の間ではほとんど傾向の違いが見られなかったのに対し、「退職者」と「無職」では、平均値の出方に違いの見られた項目があった。筆者は、それを戦争前の教育システムの影響によると考えたが、断定付けるに足るデータは得られなかった。違った要素の影響があるのかもしれない。

本調査を通して、若い世代の言語感性は比較的柔軟であり、あまり共起制限などにはとられない傾向がある。逆にそれが、他の世代にとって「乱れている」という批判をもたらしているのであろう。しかし、「会社員」「主婦」と「退職者」「無職」との比較で違いが見られたように、結局は、年齢的に上の世代は下の世代の言語感性とは異なっているのである。であるから、本調査の若い世代も、親の世代、その親の世代となるにつれ、そのときの若い世代の言葉を「乱れている」と言うのであろう。何世代たってもことが「乱れている」と言われるままでよいのだろうか、それとも規範のようなものが必要なのだろうか。

注 釈

- * 1 共起と呼応の違いについては、工藤（1982）に記述が見られる。
- * 2 本稿でいう「自然さ」とは、文法的にみて自然か不自然かなのではなく、日常談話としてみた場合に自然であるかないかである。
- * 3 実際の調査では、本稿で扱う「共起成分に辞をとる副詞」とともに、「共起成分に評価的内容をとる副詞」「共起成分にモダリティ要素をとる副詞」というパターンも設定した。
前者は、たとえば「さしてやさしいことです／さして難しいことです」のような「やさしい／難しい」といった評価的判断の対立をもつもの、後者は「彼がまさか失敗することはない／彼がまさか失敗することはないだろう」のように「ダロウ」などのモダリティ要素の有無にかかわるものである。
これらに関する考察は、紙幅の都合上別稿に譲る。
- * 4 予備調査の調査語は、島本（1989）を参考に、共起関係が認められる副詞69語を選出し、総計206の調査項目を作成した。
予備調査は、筑波大学大学院生5名、つくば市民5名の計10名に行なった。このうち、回収ができたのは、院生3名、市民4名の計7名であった。
- * 5 松井（1977）、鈴木（1987）に、大正初期、芥川龍之介が「とても」は本来否定を伴う語であると彼の著者に記述している旨の引用がある。しかし、現在の日常の会話の中では、「とてもすばらしい」や「とても早い」等、肯定的な意味合いの成分と共起する例も自然に使われる。このことは、まさしく副詞の共起に対する認識が、時代とともに変化することを示していると考えられる。
- * 6 平均値の算出法は、まず「1.自然」から「4.不自然」の4カテゴリーにそれぞれ1から4の得点を与え、各カテゴリーの回答者数と掛け合わせる。そして、その総和をカテゴリー数4で割った値が平均値であり、それは当該の調査項目がどの程度の自然さで認識されているのかを示す指標となる。1に近い値ほど自然さが高いと判定され、4に近似するほど自然さは低いと判定されたことになる。
なお、「わからない」の回答は除外してある。本調査の「わからない」は、項目中にわからない単語がある場合に限り選択するよう指示したため、「自然—不自然」の同一線上に設定していないからである。
- * 7 有意差が認められた変数のカテゴリーを各項目の右端に示した。たとえば、「若／他」は「若年層」とその他二つの年齢層に有意差が出たことを示す。また、「全」は三つの年齢層間で互いに有意差が出たことを示し、「若／中／高」と同義である。

- * 8 「いっさい」には、「お酒はいっさい飲む・飲まない・飲める・飲めない」も設定したが、予備調査の結果、全被験者が否定辞の場合「自然」で肯定辞の場合「不自然」という判定をしたため、本調査の対象から外した。

辞書の記述を見ると、「いっさい」には、名詞から副詞に転用されるようになったものとも副詞としてもちいられていたものの二種類があると考えられる。名詞から転用されるようになった場合、助詞「を」を後接することができる。

「この仕事は～」の「いっさい」は名詞転用用法の場合（「いっさいを任せる」という表現が可）で、「お酒は～」は副詞用法の場合と想定できる。自然さの判定が、この両項目間で異なったのは、このような用法の違いに起因していると考えられる。

- * 9 変数「職業」は、社会的な立場や経験の違いにより、副詞の共起に対する意識に違いが出るかどうかを見るために設定した変数である。しかし、集計の結果、世代的な違いも内包していると考えられたので、本稿では取り上げた。
- * 10 「職業」における「その他」には、主に医師、フリーライターなどの「自由業」と商店主、会社経営などの「自営業」等が含まれる。しかし、下位区分をしても、多くて4～5人程度のまとまりにしかならず、かといって「その他」で分析しても、得られる情報は非常に漠然としたものになってしまうので、19名と人数が多いのではあるが、あえて分析から外した。
- * 11 図2同様、有意差の出た変数のカテゴリーを右端に示した。表示法は、図2と同じである。たとえば「会主/退無、学/退」は、「会社員」「主婦」と「退職者」「無職」との間で有意差が見られ、さらに「退職者」に限り「学生」との間にも有意差が見られたことを意味する。
- * 12 「おそらく雨が降る」で、「学生」とその他の4カテゴリーとの間に有意差が見られた。注釈の2でも述べたが、本調査は共起成分にモダリティ要素を含む表現についても調査を行なった。そこでの「おそらく」には、「おそらく雨が降るだろう」と、「ダロウ」というモダリティ成分を付随させた表現も調査項目に加えている。その結果と、本稿での結果を比較してみると、「ダロウ」を付随した項目では、全職業を通じて有意差は認められず、平均値もほぼ1.6から1.8の間にまとまった。
- このことから、「おそらく」は、「学生」以外のカテゴリーでは「ダロウ」というモダリティ要素を付随させた方がさせないよりは許容される副詞なのに対し、「学生」では、モダリティ要素の有無に関わらず許容する傾向にある副詞と言えるのではないだろうか。
- * 13 変数「学歴」のデータを「戦前教育」（尋常小・高等小、旧制中・高・大）と「戦後教育」（新制中・高・大、大学院、短大、専門学校）に大別し、各々の中で性差があるかどうかを見た。単に「性別」だけの分析では、有意差の認められた項目は「おそらく雨が降らない」のみであったが、「性別」「学歴」を合わせて分析すると、戦前の教育を受けた被験者で、男女別で有意差が認められたのは8項目あった（「あんまり（否定）」「決して（肯定）」「さほど（肯定）」「ぜったい」の両項目、「ぜんぜん（大丈夫）（肯定）」「どうか（否定）」「まだ（残）（否定）」、具体的数値は割愛）。しかし、このうちで「退職者」「無職」間にも有意差の出た項目は「決して」のみであり、戦前の教育を受けた男女と「退職者」「無職」の言語感性の関連性は強いとは言えない。

参考文献

- 工藤 浩 (1982) 「除法副詞の意味と機能」、『国立国語研究所報告71 研究報告集—3—』、pp. 45-92
- 島本 基編 (1989) 『日本語学習者のための副詞用例辞典』、凡人社
- 鈴木 英夫 (1987) 「言葉の誤用—誤表現と誤解—」、『国文法講座6 時代と文法 現代語』、山口明穂編、明治書院、pp. 76-101
- 松井 栄一 (1977) 「近代口語文における程度副詞の消長」、『松村明教授還暦記念 国語と国語史』、明治書院、pp. 737-758